



最後の一枚の葉（11）

「わたしは、自分の力のおよぶ限りのこと、科学ができることはすべてやるつもりだ。でもな、患者が自分の葬式に来る車の数を数え始めたら、薬の効き目も半減なんだよ。もしもあなたがジョンジーがいとうに、冬にはどんな外套の袖が流行するのか、なんて質問をさせることができるなら、望みは十に一つから五に一つになるって請け合うん



最後の一枚の葉 (12)

だがね」

医者が帰ると、スーは仕事部屋に入って日本製のナフキンがぐしやぐしやになるまで泣きました。やがてスーはスケッチブックを持ち、口笛でラグタイムを吹きつつ、胸を張ってジョンジーの部屋に入っていました。

ジョンジーはシーツをかけて横になっていました。しわ一つもシ



最後の一枚の葉（13）

一ツに寄せることなく、顔は窓に向けたままでした。ジョンジーが眠っていると思い、スーは口笛をやめました。

スーはスケッチブックをセットすると、雑誌小説の挿絵をペンとインクで描きはじめました。若い作家は文学の道を切り開くために雑誌小説を書きます。若き画家は芸術の道を切り開くためにその挿



最後の一枚の葉（14）

絵を描かなければならないのです。

スーが、優美な馬のショー用のズボンと片眼鏡を主人公のアイダホ州カウボーイのために描いているとき、低い声が数回繰り返して聞こえました。スーは急いでベッドのそばに行きました。

ジョンジーは目を大きく開いていました。そして窓の外を見ながら数を数えて— 逆順に数を数えて



最後の一枚の葉 (15)

いるのでした。

「じゅうに」とジョンジーは言い、
少し後に「じゅういち」と言いま
した。それから「じゅう」「く」と
言い、それから「はち」と「なな」
をほとんど同時に言いました。

スーはいぶかしげに窓の外を見
ました。何を数えているのだろ
う？

つづく